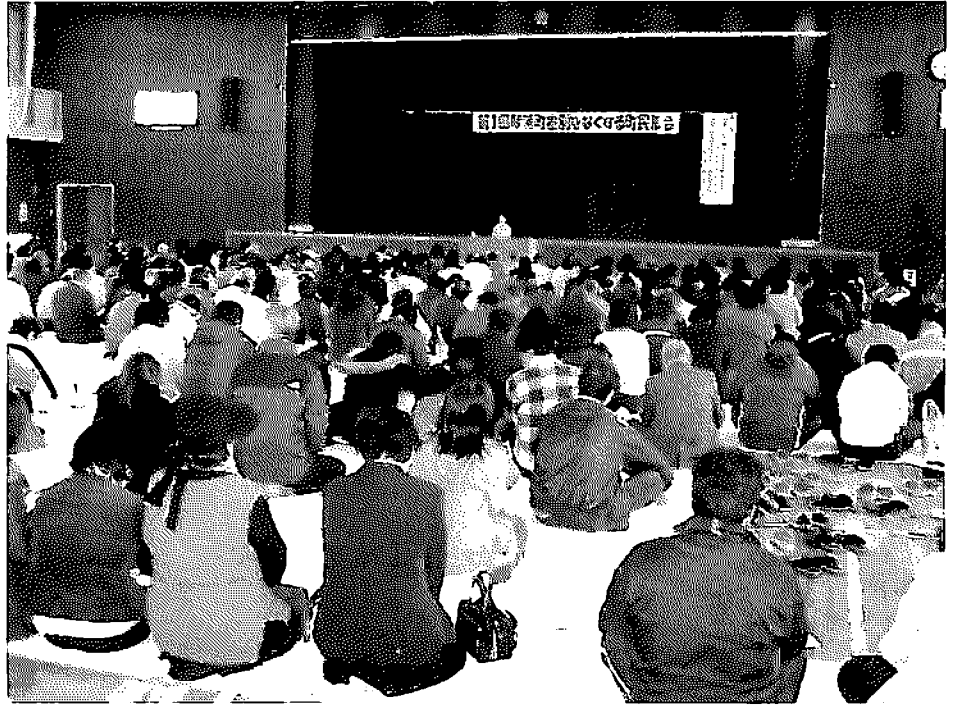


つながりあうことうら

第2号 2006. 3. 31 発行：琴浦町同和教育推進協議会

第1回琴浦町差別をなくする町民集会

(2・3面)



部落解放文化祭 (4・5面)

社会的立場の自覚を深める学習

(6・7面)

琴浦町同和教育講座①～③ (8・9面)

第57回全国人権・同和教育研究大会参加報告

(10面)

名称のご応募 ありがとうございました

みなさまから、多数お寄せいただきました広報紙の名称を、広報委員会におきまして協議しました結果、上記の名称に決定させていただきました。

ご応募いただきました多くのみなさん、ご協力ありがとうございました。

なお、この広報紙に関するご意見をお寄せください。おまちしております。

【問い合わせ先】

琴浦町教育委員会 人権・同和教育課

TEL 52-1111

第1回琴浦町差別をなくする町民集会

「この魅力ある教育をともし」

わたしねえ おかあちゃんの子どもで本当によかったよ

徳島県吉野川市人権擁護委員 松村 勝子さん

快く思っていますでした。

これが教育なんだ！

佐藤先生に出会ったのは一九七七年です。私がいた中学校へ校長として赴任して来られました。同和教育に熱心な方だと知っていましたので、当初、私も含めて周りの教員も

二〇〇五年十二月四日、赤碓中学校において、差別をなくする町民集会が開催されました。

全体会では、徳島県で教師をされていた松村勝子さんからご講演をいただきました。その後、十二の分散会で討議を行い、身近な生活の中からの同和教育実践について話し合いました。

佐藤先生は大変物静かな方でした。「とにかく、私はみんなに幸せに生きて欲しいんですよ。私の思いにあなたが共感してくれるまでずっと待ちます」ということで、人に押し付けられないです。本当に自分の態度で示してくださいました。だから、佐藤先生の人間的な魅力にみんな引き込まれていったんです。ある、本当に若いやんちゃな先生が雑談の席で言うんです。「私もいろんな人に会ってきた。憎らしい人もいっぱいあった。けど、佐藤先生とすれ違ってくただけは自然に頭が下がる」

生徒はそんなことはしませんよ」そうおっしゃいました。「同和教育というのは、自身の自分を厳しく見つめて、どう生きていくことが本当の生き方なのか。人間として誇りうる生き方とはどんな生き方なのか。そのことを子どもに問いかけ、教師である自分に問いかけ、共に語り合い、生き方を問い続ける教育なんです。本当に先生が前向きに、誠意を持って同和教育をすれば、掃除をサボる子にはなりませんよ。生活が荒れている子を放っておくクラスにはありませんよ」

いつも佐藤先生の言葉には、人間の生き方を支えるものは同和教育だという強い信念が溢れていました。

わたしねえ おかあちゃんの子どもで本当によかった

K子という女の子がいたんです。お母さんが病気でした。



お父さんは土木作業の仕事で一生懸命働いてました。でも、稼いだお金が全部お母さんの治療費に回ってしまってます。学校の集金も遅れがちでした。K子は貧しい中で、かなりやけっぱちな状況になっていました。荒れる中で、他の子たちからも敬遠されてきました。私はこの状況を変えるには、同和教育しかないと思いました。丸岡忠雄さんの詩集の学習をしたんです。もう、これでもか、というくらいしました。そして丸岡さんに、テープにメッセージを吹き込んで、子ども達に送ってくださるようにお願いました。

「ありがとうございます。先生が一生懸命この授業をしてくれたのは、私のためにしてくれたってわかった。私は、お母さんが腹立たしかった。私がこんなに貧しい、学校の集金さえ持つて来れん。お父さんも朝から晩まで一生懸命働いてる。こんなに家族を苦しめてるのはお母さんだ。『お母さんが早く死ねばいいのに』私はそんなことを思ってた。」

でも、丸岡さんのことを学んで『私はそんな怖いことを考える人間だった。何て冷血なんだ』と気づいた。今日から私は生まれ変わる。お母さんが一生懸命育ててくれたから、お母さんのおかげで私今ここにあるんだ。だから私はお母さんの味方になりたい。先生、この授業をしてください。ありがとうございます。みんなありがとう。私をさけてたのはわかってた。けど、今は私を励まそうと頑張ってるの、本当に感じてる。みんなありがとう。K子は語りきりました。同和教育はこういう教育を、人をつくっていくんです。

分散会

「日々の私たちの会話について」

考えましよう

一、日常会話において、相手の住まいや仕事、家庭状況等、安易にたずねていませんか？

○自分のことを振り返ると、職業を聞いたり、お父さんお母さんは何をしているか聞いた時、また住所を聞いた時、自分自身は偏見を持ちやすいと感じている。家族構成を聞いた時なども、「ああこの人はこうなんだ。」と思ってしまうような自分がいる。

○親しくなるには、共通点を見つけて出すことから入るので聞いてしまう。聞いた情報をどう活用するかが問題になると思う。
○結婚の際、情報として聞きたい。結婚によって家族にいろんな関わりが生じる。言わんでいい、聞かんでいいでは済まない時もある。その情報をどう判断するかが大事。
○この会の自己紹介でもほとんどの方が自分の所属・役職

を言われたが、不都合を生じないから言われたのかも知れないが、それを聞いて固定観念が生まれると思うし、必要ではないと思うので自分は言わなかった。

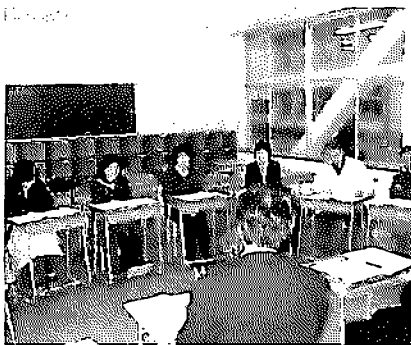
○堂々と被差別部落の出身であると言える世の中になっていかなくはいけないのに、まだまだ傷つく現実がある。
○初対面の人には、自分のことを紹介してから相手に聞くようにしている。自分をさらけ出すと、相手も入ってきやすくなるのではないか。

二、「うわさ話」を聞いていますか？他人の「うわさ話」を聞いてどうしますか？本人から聞いたことでもないのに、「うわさ話」を信じてしまつのはなぜでしょうか？
○自分に利害があるかないかを前提にしていると思う。自分に関わることならうわさ話の受け取り方が違う。人の不

幸話を聞いて、安心することもあるのでは。
○傍観者は結果も関係なく無責任である。

○世の中の情報は知る必要がある。話の内容によっては深く聞く必要があるものもある。人を傷つけることはいけないが、見極めが必要。情報は大切なものであり、うわさは悪いことばかりではない。

○自分が判断できる感性をもっているかどうかも大切だ。
○自分の子どもが保育園での事を家で話す。子どもの言っている事だけを鵜呑みにしないで、親として、その事に対していろいろな考え方や、見方を教えていく、親の関わりが大切だと感じている。

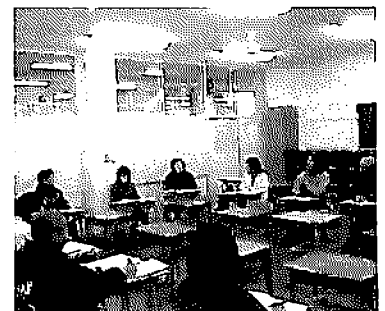


○「あんたのうわさが出とるぞ。」と教えてくれる人もいる。同和教育を通して、そういうことに気づいて、正しいかかないといけないと気づき始めた。祖母が外で聞いてきたうわさ話を聞く時、自分が違うと知っていることは、きちんと「違う」と話すようにしている。

三、結婚のときに、相手のどんなことが知りたいですか？

○自分の子どもが結婚を考えている場合はいろいろなことが知りたい。相手に近づきたいために知りたいと思う。
○誰と結婚しようと反対はしないが、収入があればいい。職がないと心配をする親の気持ちがある。

○月に五回くらい聞かれる。特に家族構成のことが多い。自分のことではないので答えるが、自分の家族のことを他で探られると嫌だ。
○本人抜きの話は基本的によくない。「本人に聞いてみては」と言うのがいいと思う。
○うわさ話と同じ。自分の目



ではなく。人の目を通して、確かめようとしてもあてにならない。だからやめた方がいいと思う。

○例えば近所の人のことを聞かれたとして、自分はどれだけその人を知っているか。ということを考えてみれば、安易に答えられるものではない。むしろ何でそんなことを尋ねるのか問いただしたいと考えている。

○学歴をなぜ選挙の時に入れるのか。人柄で選ぶつもりだ。結婚の場合も家柄や出身地で選ぶのはおかしいと言いきれる。
○旧町報のお祝いの欄に、どこの誰との結婚と紹介されていてびっくりしたことがある。今でもあるのだろうか。

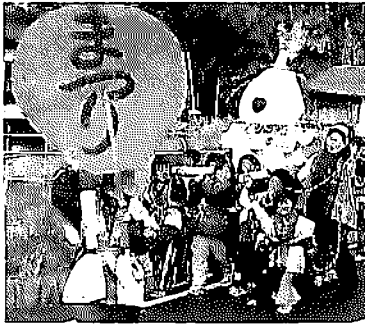
第20回赤碓部落解放文化祭

二〇〇五年十一月十九日、二十一日に町内外から約千二百名の方が集いました。保小・中の子どもたちや大人の渾身を込めた作品展示。また、さまざまな取り組みにより開催されました。

二〇〇五年十一月十九日、二十一日に町内外から約千二百名の方が集いました。保小・中の子どもたちや大人の渾身を込めた作品展示。また、さまざまな取り組みにより開催されました。

子どもまつり

解放「学習会」の中で、夏休み前からどんなみこしを作るか相談し合い、各子ども会で協力し、工夫を凝らしたみこしが出来ました。そのみこしには「戦争をしない平和な世界に戻って、いろんな人が協力し合うように、また差別



を許さない」という願いが込められています。

当日は「わっしょい、わっしょい」と仲間と共に楽しく、はしゃいで、たくましくつながるその光景に、子どもたちの悠々と広がる未来を感じました。

演芸発表

熱い思いとぬくもりの輪 楽しい秋の運動会が終わると、私たちは、部落解放文化祭に向けて動き出します。

部落解放文化祭は、まず、自らが参加することに意味があるという思いの中で、演じる人も見る人も一丸となって取り組み、子どもから大人まで、女性も男性も共に楽しめます。

毎年この演芸では、それぞれが面白おかしく趣向を凝らして熱演を披露します。日ごろの活動を通しての手話教室や踊りで活躍しているオアシス会、台所用品を使った親子での演奏、芸者に扮した二人芝居など熱演の連続で、始め

毎年この演芸では、それぞれが面白おかしく趣向を凝らして熱演を披露します。日ごろの活動を通しての手話教室や踊りで活躍しているオアシス会、台所用品を使った親子での演奏、芸者に扮した二人芝居など熱演の連続で、始め



姐さん、芸子の修行も大変とすなあ

から笑いの渦でした。

年に一度しか見られないこの演芸には、「いつまでも元気でいよう」という気持ちと、「この次も笑顔で会いましょう」という温かい思いが込められています。

解放教育講演会

「人間の歴史に学ぶ私の生き方」

住本 健次さん

小倉東高校教諭

一、私たちの生活の中にある特徴的な差別意識

- ① 集団への帰属意識が強く、自分が所属しているところを「うち」そうでないところを「外」という考え方をしている。世界でも日本だけである。
- ② 周囲の目を気にし、周りに合わせようとする意識が強い。
- ③ 人がどんな集団に帰属して

いるかを気にする意識が強い。④ 違う集団に帰属する者に対して非協力的・排他的・閉鎖的な傾向が強い。

二、このような私と共同体にある生活の中の差別意識を許さない仲間に

「周囲の人に合わせる。周囲の人から浮くことを恐れる。自己主張を抑える。」という

ムラ意識にとらわれると、自分の集団内で異質とみなした者への排除が始まる。江戸時代には、自分たちには考えられない、できない(鉄の加工や染色など生活に必要なもの)と思っていることをやっている人たちに対して、異質な集団とみなした。同じであることを求める社会では、「同和」教育が始まって五十年経っても、異質とみなした者を排除するムラ意識が克服できていない。

である。同じにすることと平等にすることは別。平等なのは「尊厳と権利」だけ。それ以外は同じであってはならない。同じがいいことだというのはムラの論理。子どもを平等にするということは、子どもたちに同じ行動をとらせることではない。団体行動をとらせたり、同じになることを求めたら同じになれない子どもに対して仲間はずしの排除が始まる。

三、差別を克服するための視点 一人ひとりを大切にし、差別を克服するための視点は、自らの生き方に、まず「違い」を大切にする。これは口で言うほど簡単ではない。五百年、千年の文化の集大成。みんな同じというのはプラスの価値観として持っている。そこで、ひとくくりから、一人ひとり

と考えるようにしていく必要がある。「あの人たちはとか、女性とはか」というくくりではなく、一人ひとりの「個性」を見つめ、一人ひとりの「違い」があつて当たり前という視点が大切である。

第30回部落解放文化祭(東信)

自ら進んで参加する取
り・笑顔



『青年部の餅つき』

青年部として自分たちができることを、進んで参加する取り組みを！との思いから毎年、みんなでアイデアを出し合いながら参加している。今年の解放文化祭は、三周年と大きな節目の年。そして改修記念もかねて、青年部が餅つきをし、みんなにぜひを食べていただいた。青年部は活動を始めてまだ短い期間だが、まとももあり定期的に活動を続けている。餅つきは、青年部だけではできないので、役場の若い人や保育士さんたちに手伝ってもらった。その場で、手ごねを進んでしてくださったムラのおば

ちゃん、みんなの協力できた餅つき。とてもおいしくできあがり大勢の方に喜んで食べていただいた。

いろいろな学習を重ねてきたムラの子どもたちが、学校を卒業して青年になり、社会に出た時、青年になった時、その学習を続けていきたいと思っても、その受け皿がないというのでは非常に寂しい。華々しい活動はなかなかできないが、青年部がその受け皿となれるように今後も継続して取り組んでいきたいと思う。



『解放文化祭とのかかわり』 〜同和問題懇談会より〜

二回目の部落解放文化祭から取り組みに参加してきた。

最初の頃は、小学生の発表もつまったり、下を向いたままの子どもが多かった。その後、学習を積み重ね、次第にみんなが自分の気持ちに自信を持ち、しっかり発表できるようになってきた。教育の大切さを感じている。

部落問題について考えるようになったのは、前の隣保館でいろいろ話し合うようになってからだ。以前は考え違いをして、人の足を引っ張るような発言をした事もあった。自分に人権に対する意識がなかったのだと思う。

その後、仲間の人と一緒に行動を共にしながら、自分なりに勉強をしていった。それで少しずつ変わっていくことができた。差別というものを考える時、部落差別は、被差別部落以外の人が考えないといけない。ただ「部落外の人差別しなければいい」という事ではなく、被差別部落の人も、差別に気づくだけの勉強をしていかなければ、いつまでも立ち向かうことができないと思う。

人権問題を考える時、他人の為に何をしてあげるとか、人を差別してはいけないという前に、自分自身が人間としてどう生きていくかを自問自答することから始まる。幼い頃から感性を育むことが大切。相手の気持ちになって考えることができるように、人権尊重の精神を育む。地域において、みんなが心豊かに暮らしていきたいと願う。私たち一人ひとりがどれだけ自分の問題として自覚し、行動できるかにかかっている。

『幼児交流会と地域の人との交流を通して』

昨年から幼児交流会の子どもたちと民謡教室の皆さんとの交流をしています。「一緒にしような！」「おばちゃんたちも、ぼくたちと踊れてうれしいわ」等と、温かい言葉をかけてもらってうれしそうでした。「むつかしいな」と言いながらも最後まで頑張った子どもたち。当日は大勢の人の前でもしっかり踊ることができました。保護者同士協



力しての送り迎えや、忙しい中を、みんなが関わってくれた民謡教室の方の熱意の賜物だと思えます。

また、書初めでは、ペン習字教室の先生に教えていただきました。筆の扱い方に悪戦苦闘しながら「さつきよりだいぶん上手になってきたぞ」等、その子に合った言葉かけと丁寧な指導で、力強い字を書くことができました。地域でいろいろな人に関わってもらう中で子どもたちは成長するものです。健やかな子どもたちの成長をめざして、家庭・地域で連携を深め、地域ぐるみで子育てをしていくことの重要性を痛感しています。

「社会的立場の自覚を深める学習」

人権・同和教育の一環として「自らが置かれている社会的立場の

まだまだ、未熟な面も見られます。ここからの出発を期待し、そして、同じように「友だちも大切であること」を基盤にして、ゆる差別」をなくしていく主体者になっていくことを願っています。

赤碕中学校区

赤碕小学校

～すてきな自分へ
すてきな仲間へ～

学習の流れ

- ・ ワークショップ
- ・ 保育園や百寿苑との交流
- ・ 人権教育推進員さんと学習
- ・ フィールドワーク
- ・ 解放「学習会」について
- ・ いつも心に荊冠旗を
- ・ 身の周りにある差別と自分
- ・ 部落問題と自分について
- ・ 部落解放文化祭に向けて
- ・ 反差別の立場に立って

以西小学校

～すてきな自分に、すてきな仲間になるために～

学習の流れ

- ・ 人々の生き方に学ぶ
- ・ 「現地」に学び、反差別の意識を持つ
- ・ みんなが幸せに生きるために、これからの自分の行動について考える。
- ・ 交流学習を通して、「思いを伝えることの大切さ」
- ・ 「つながることの大切さ」を実感する。
- ・ 反差別の立場に立って行動

子どもたちの感想より

○もし、自分と親しい人が差別的なことを言ったら、注意したい。また、自分はこの学習をして、失敗をおそれず発表できるように頑張って来た。○人として許せない言動に対して勇氣と自信を持って「おかしいよ。」と言えるようになった。これから先、差別をすることがあるかもしれないので、繰り返し学んでいきたい。そして、人との出会いや縁を大事にして、自分らしい生き方をしていきたい。

する。

子どもたちの感想より

○アンケートを見て、自分はどうなのか、振り返りました。自分は一人ではない。まわりにはみんながいるということをおぼれたらいいなと思いましたが、命、家族、友だち、みんなを大切にしたいです。



安田小学校

～すてきな自分に
すてきな仲間へ～

学習の流れ

- ・ 生き方に学ぶ①
- ・ 人権教育推進員さん
- ・ フィールドワーク
- ・ 解放「学習会」について
- ・ 生き方に学ぶ②
- ・ *米子市人権情報センター
- ・ *赤碕中学校の先生
- ・ *保護者の方
- ・ 自分自身の行動の振り返り
- ・ 意見発表 (全保護者へ)

成美小学校

～つながる力、会を
生きる力、未来を生きる力～

学習の流れ

- ・ フィールドワーク
- ・ 解放「学習会」
- ・ 「みんな輪になって」
- ・ 生き方に学ぶ①②
- ・ (部落問題との出会い)
- ・ 旧赤碕町意識調査の実態とわたしたちとの関わり
- ・ 部落解放文化祭に向けて (タペストリー作り)
- ・ 心の中に荊冠旗を

子どもたちの感想より

○アンケート結果を分析してみても「被差別部落の人が努力すればなくなる」と答えた人には、差別は一部の人が努力すればなくなるのではないうということをおぼえたいです。なくす努力をしなければならぬのは、差別をしている人、そしてそのまわりの人なので、だから、わたしたちがなくす行動をしていかなければならぬのです。

子どもたちが学習したこと

○人を大切にする。自分の思いを相手に伝える。自分を分かるとは、振り返ること。差別は人がつくってきたものだから、人がなくさないといいない。毎日の生活からも部落差別につながることもある。自分は差別してはいないと思ってもやっている時がある。だから日々自分の行動を見直していく。ぼくにも差別の心があることに気づき、これからみんなが楽しく生きることの出来る生活をめざす。



6年生における「自らが置かれてい

東伯中学校区

6年生が11月から12月にかけて、総合的な学習の時間を中心に「自覚を深める学習」を行いました。

各学校の子どもたちは素直に自分の心を文章化してましたが、一人ひとりの児童が、まず「自分自身が大切な存在であること」そのことから、共に手を取り合い連帯して「部落差別をはじめあら

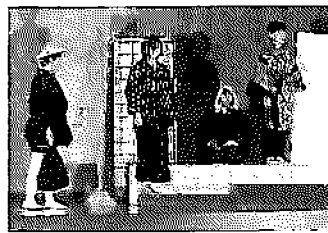
古布庄小学校

部落差別をなくしよう ～自らを見つめて～

社会的立場の自覚を深める学習では、児童四人が、額を付き合わせながら真剣に考えている姿の中に、部落差別をはじめとするあらゆる差別を解消する原点があるように感じられた。その後、人権学習のまとめとして、社会見学で訪問した洪染一揆記念館で学んだことを人権劇にして発表した。四人の力を存分に発揮し、差別と闘う人々の熱い想いをみごとに表現していた。

人権劇を終えての感想

人権劇を四人で成功できてよかったです。劇をするまでは、声が小さかったけど、この劇を通して自信を持って話せるようになりました。そして、差別をなくしたいという気持ちが強くなりました。見ている人に感動を与えることができ、うれしかったです。



東伯小学校

よりよい自分になるために ～部落問題を通して～

部落差別は自分には関係ない人ごとのように考えていたけれど、いろいろな学習を通して、人ごとではなく、自分にも関係することだとわかりました。

身近にあるいじめや、悪口を言ったときや言っているのを見て気づいても自分には関

係ないやと 思つてしま うのも、部 落差別は被 差別部落の 人がなくせばいいという考え 方と関係していることに気づ きました。わたしは部落差別 をなくすために身近にある差 別からなくしていきたいです。 差別をなくすために、自分が できることを見つけていきたく いです。



浦安小学校

部落差別を なくすために

私は八人の話を聞いて、自分のしてきたことが悪い事だと心から思いました。差別されてきた人の努力や悲しみを知らずに、悪口を言ったり冷たくしたりするなどをしていたのでとても悪かったと思いました。発表の中で友だちが言っていた「人は変わる」ということを信じて自分が変わるように精一杯がんばります。

私はちよつとのことですぐいらついでにいました。それは弱い心だと気づきました。これからは、相手のことを考えておこないように、そして強くなるようにしていこうと思えました。私は差別するとか、されるとか関係なく、差別自体をなくしたいと真剣に考えるようになりました。



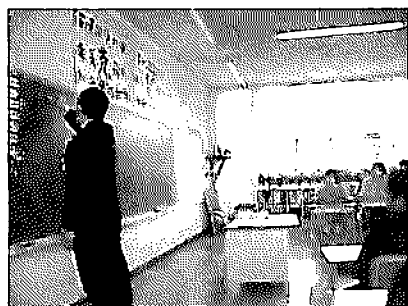
八橋小学校

部落差別をなくそう

児童の感想

手を挙げるのは、とても勇気がいることでした。このまま手を挙げなければ、自分の人権宣言もできないし、自分も変われないと思えました。泣いてしまった所もあったけど、これからの自分がみんなに聞いてもらえたので、うれしかったです。

これからも、心のハードルなんかに負けないで、差別をなくしていきたいです。



琴浦町同和教育講座

「差別とは何か？」

〜今一度、原点を考えてみませんか？〜

鳥取県部落解放研究所 吉岡 悟志さん

講演要旨

差別とは、ある個人を、ある「くくり」に属するとして、不利益・被害を生じさせる。にもかかわらず、自分の行為を正しく見せようとする行為である。

差別は、被差別者にとって、いわれ(＝理由)なき差別である。しかし、差別者にとっては、いわれ(＝理由)

同和教育講座が二月八日、十九日、二十八日の三回、開催されました。

この講座は、同和教育推進者の養成を目的としながら、ひろく住民の方にも参加していただきました。そこで、講座参加者の感想・意見をご紹介します。



がある。つまり、差別は差別者の恣意(都合)によるものなのである。

同和教育の中で、「背景」と言ってきたのは、人間に影響をもたらしている教育、文化、人間関係、生育歴、ジェンダー、マスメディアなどをさす。差別を単に個人的な問題にするのではなく、社会的な問題にしなければならぬのは、ここに根拠がある。

講座①を受講して

同和教育推進員

松本千美栄さん

「差別とは何か？」と題して何を差別と捉えるのか、なぜ人は差別をするのかを改めて学び直した講座でした。その中で差別は、差別する人の中に「利益」、「安心」、「癒し」をもたらすという言葉が私の心に深く刻まれ、自分自身の心を問う機会となりました。

自分の欲求不満の解消や誰かを排除したりすることで気持ちよくなったり、自分より弱いと感じた相手を攻撃することはしてはならない行為だと気づくには、人権・同和教育講座や研修会に自ら参加し繰り返し、繰り返し学び続けていくことが差別の芽を摘み、差別をしない・させない自分や地域につながっていくのではないのでしょうか。

各地域で開催される同和教育部落懇談会(小地域懇談会)



の出席者がとても少ない現状の中で、自分の住んでいる地域が被差別部落だったら、自分に障がいがあったら...と他者を思いやる気持ちをもって

生活することが出来る地域になるように、同和教育推進員として微力ながら活動していきたいです。

「人として、親として」

〜同和教育を通して学んだこと〜

鳥取市面影小学校教諭 土井 款さん

講演要旨

同和教育は、自らの生き方や価値観を見つめ直し、自分を変えていく営みである。自分のこととして取り組むことで、差別を温存している社会のしくみなど、今まで見えなかった事、気づけなかった事に気づき、見抜けるようになる。そして、差別をしない関

係づくりや連帯は、将来への展望を見出ししていく。同情や哀れみでは差別はなかせない。傷ついたとき、「いやだ」「不安だ」と言える、その声を受け止め課題解決に共に歩む関係をつくっていくことが必要。最も不安や心配を抱えている人から不安や心配を取り除く関係(仲間)づくりをする。差別をつくり出す考え方から、差別をなくす考え方に変革していく。

講座②を受講して

松田 秋子さん

同和教育は人と人をつなぐ教育です。誰もが安心して、自分らしく生きることができ、社会を築くことをめざして

行うものです。

しかし、差別をしていないし、されたような覚えもない、だから、同和教育を学ぶ必要がない、自分には関係ない(他人事)と思われる人が多いのではないのでしょうか？

無知ほど怖いものはありません。いろいろな問題に出合ったとき、何が正しくて、何が間違いかということに、気づくことのできる人でありたい。その間違いを堂々と胸をはって言えるだけの人になりたい。そして、子どもをそういった気づくことのできる人間に育てていくことが、私たち大人の義務、責任ではないでしょうか。

同和教育とは人の生き方、人間としてのあり方、大切な命の尊厳を学ぶ場と想っています。自分に何か困った事が起こった時、必ず役に立つと思っています。周りの仲間と寄り添いあって生きていきたいと思えます。

この学習こそ、奥の深い一生涯の自分のための命の学習

だと信じております。

講座③ 「わたしがつくる人権文化」

鳥取県人権文化センター 中尾 智則さん

講座③は、ワークショップ(参加体験型学習)を行いました。

従来の講演形式による見る、聴くに加え、自らが参加・体験することで、気づき、考え、語り、行動することを通して、参加者自身が共につくりあげていく研修方法です。

まず、参加者の緊張をほぐし、グループ分けをするために、アイスブレイキングとしてジャンケンゲームを行いました。



その後、二つの会場に分かれて、身近な人権問題について話し合いました。

なお、発言をしたくない方には、パスできる権利があるということも確認し、気軽に参加できるようにしました。

講座③を受講して

赤碓地区公民館館長

山根 喬さん

「おや？」何かおかしい、と日頃気づくことがあります。問題ワークショップに参加し、学習する機会がありました。

まず参加者がグループ(四人五人)に分かれ、与えられた「街角の風景図」を見て、人権にかかわる問題箇所をチェックしていきました。次に、それを取り上げた理由―住みよ



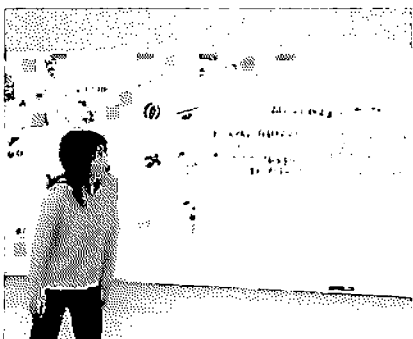
アンケートの感想・意見

○「おかしい」ことが「おかしい」と気づける、同じグループの隣の人の人権感覚・人権意識のすばらしさに感心しました。私も研修を積んで、さらに高まって行きたいと思えます。

○自分の視点だけでなく、いろいろな立場の方の視点で見なければ(気づいていかなければ)いけないと、改めて勉強しました。

○何気なしに過ごしているまじにも、多くの問題点があることに気づかされた。誰にでもやさしいまちづくりをめざす。同和教育部落懇談会に今回の内容を活用したら、皆が参加できると思う。

初めてのワークショップで不安もありましたが、共同作業で人権に関する様々な意見、気がつかなかった点がありました。一緒に考え、話し合うことの大切さを教えられ、有意義でした。と同時に、なぜ同和教育を学ぶのか。「差別があるからだ」と言われたことが頭に残っています。



第57回全国人権・同和教育研究大会

参加者報告

琴浦町町民生活課長

前田 順一さん

二〇〇五年十一月二十六日
二十八日の三日間、宮崎県
において開催された第五十七
回全国人権・同和教育研究大
会に参加させて頂きました。

初日は、開会行事後「同和
教育を基軸にした人権教育の
内容創造を」と題した基調提
案がありました。午後、分科
会は特別部会に参加し、鳥取
大学大学院医学研究科教授、
藤井輝明さんの演題「個性を
認めあえる豊かな人間社会を
めざして」の講演を拝聴しま
した。

先生は、二歳頃から右ほほ
が、海綿状血管腫という血管
系の組織が異常に増殖する病
気になり、「バケモノ」「お岩
さん」などと言われ、いじめ
や差別をされたが、両親の海

よりも深い愛情に育まれ、自
分は大切な存在であると思え
るようになり、頑張れて今の
自分があると語られました。

両親は、人をいじめたり、
悪口を言ったりすることは許
されないことである。「生ま
れてきたからには無駄な人間
はいない」その人にしかない
価値・かけがえのない人生が
あると語られました。

差別を許さない取り組みは、
様々な場面で努力がなされて
います。しかしながら、今な
お差別が残されている現実も
あります。藤井先生親子のよ
うに深い愛情で結ばれ、それ
が地域にも広がっていけば、
一人一人を皆が大事にするよ
うになり、必ずや
差別はなくなると
考えさせられた有
意義な研修会でし
た。



琴浦町人権教育推進員

山田 栄喜さん

第七分科会「生活課題と学
習活動」に参加しました。大
阪府八尾市立桂中学校の同和
教育実践を紹介します。

「うちらは、あんたをほっ
とかへんで！一緒にやろうや！」
この子どもたちのつながり、
高まりをつくるためには、ど
のようなキッカケが必要な
か。

子どもがどこで変わるのか
は、その子が「変わらな、あ
かん！」と思ったとき。その
時に大人がうまくサポートで
きたとき変わる。しかし、教
師はそのタイミングをうまく
つかみきれないのが実情。
そこで、被差別部落のおっちゃんや在日コリアンの青年など、
いろいろな人との出会いをつ
くっていく。厳しい差別の中
をたくましく、温かく生き抜
いてきた人たちと出会うこと
で、変わるキッカケをもらっ
ている。

桂中は机の配置を一日中、
班型にしている。授業も弁当

を食べるときも、常に生徒同
士がお互いの様子を確認し合
いながら生活する。班には
「班ノート」が配られる。自
由に書き込みをして回してい
く。最初は落書き程度から始
まる。しかし、様々な人との
出会い、クラスミーティング
での語り合いなどを通して、
本気の思いが伝わられる。そ
の思いに本気で返していく、
支えていく思いが伝わられる。

子どもたちは、家庭での親
の暴力、両親の離婚など、様々
に抱えていたしんどい部分を
すべてさらけ出して語り合う。
その語りがあるからこそ、深
いつながりが生まれている。
安心して語り合える環境を
大人がどのように作り出すの
か。このことがとても大切だ
と感じました。

安田小学校教諭

磯田 由夫さん

全同教の参加は四回目にな
りますが、いつも参加者の熱
い思いにふれ、もつとがんば
ろうというエネルギーをもらっ



たり、自分自身どうだろうか
と考えさせられたりします。
宮崎大会で特に心に響いた
のは、熊本の方の発言でした。

その方は、自分自身と息子さ
んの結婚差別体験を話され、
最後、私たち教員に、「差別
は石ころのようにゴロゴロ転
がっている。差別があるから、
運動団体の私たちがこういう
場でマイクを持たなければな
らない。だから、先生たち本
当にがんばって」と言われま
した。人間の尊厳を踏みにじ
る差別の醜さを感じるととも
に、自分自身の不充分さを感じ
ました。

差別をなくすために最も大
切なのは、教育だと思えます。
そしてその教育になっってい
るのが私たち教員です。全同
教で感じ取ったことが、頭の中
で踏みとどまるのでなく、
教育の中でしっかりと返して
いきたいと思えます。